# 兵庫県のツツハナバチ類

今　井　國　貴

冬が去って，田畑がレンゲやナタネの花でおおわれる頃，農家の庭先や納屋の脇に積まれた細い竹やよしずの管を見て下さい。きっとそこには，腹の下面に黄色の粉を一杯つけて管にもぐり込む，ミツバチより小さく，やや黒いハチの姿があるだろう。

このハチは，ツツハナバチ属ハナバチで，付近にたくさん咲いている花から花粉や蜜を集めて，管の中に巣を造っているのである。

ツツハナバチ類はファーブル昆虫記に書かれているハキリバチと近縁で，竹などの管に営巣するハナバチのグループの一つである。この類は重要な花粉媒介昆虫で，我が国でも多くの作物の授粉に利用されている。

この類で日本での分布が報告されているのは，シロオビツツハナバチ，マメコバチ，ツツハナバチ，オオツツハナバチ，マイマイツツハナバチ，イシカワツツハナバチ，およびイマイツツハナバチの7種であるが，県下には，イシカワツツハナバチ以外の6種が生息している。

ツツハナバチ類はすべて年一世代で，県下では，3月頃，まず雄が休眠からさめて巣管から出てくる。雄は約1週間遅れて休眠からさめる雌を古巣の周囲で待ちうけ，雌が出てくるとすぐ交尾を行う。交尾のすんだ雌は，古巣の場所を覚えるための飛行を入念にした後，古巣を離れてゆく。

それから1～2週間たつと，ほとんどの雌は古巣に帰ってきて，その辺にある管に次々と出入りをくり返すが，そのうち，1本の管にだけ何度も出入りするようになる。それはその管の径や内部が気に入り，管の清掃と同時に位置を記憶しているのである。それが終ると，花粉や蜜を集めて花粉団子を造る。20～30回の花粉の運び込みで一つの花粉団子ができあがると，その上に産卵して，その室を泥，または葉をかみつぶした壁で閉じる。そしてまた次の花粉団子をつくり始める。こうして天気さえ良ければ，雌は1日に2，3個の虫室をつくる。この作業が6月頃まで続けられ，1本の巣に20以上もの虫室が並ぶ場合もある。この時，巣の奥側の虫室には雌の卵が，入口側には雄の卵が産み込まれる傾向があるが，花粉源植物や管の状態，ハチの老若などで変わることもよくある。この産み分けで，春早く休眠からさめる雄が入口側に産み込まれていることは興味深い。

卵は約1週間でふ化，幼虫は1か月ほどで花粉団子を食べ終り，繭をつくって前蛹で夏を越し，9月末には新成虫となって管の入口に頭を向けたまま休眠に入って冬をすごす。

ツツハナバチ類を営巣させるには，冬の間に，竹やよしずの積んである所の付近に，タケやヨシの管の束（内径5～10㎜，長さ20～30㎝，節のある管約50本で一束）を置いておけばよい。

現在までに，トラップネストと訪花調査によって報告，確認されている。県下のツツハナバチ類の分布は次の通りである。（※印は多産地）

- シロオビツツハナバチ；姫路市※，明石市※，小野市，加西市，宍粟郡一宮町，多紀郡，八鹿町，日高町，和田山町
- マメコバチ；小野市※，三田市※，姫路市，明石市，加西市，西脇市，市川町，南光町，氷上町，多紀郡，八鹿町

  本種はリンゴなどの授粉に利用されている。
- ツツハナバチ；多紀郡※，姫路市，明石市。
- オオツツハナバチ；三田市※，社町，小野市，加西市，柏原町，市島町，市川町，南光町，安富町，宍粟郡一宮町，多紀郡
- マイマイツツハナバチ；多紀郡。

本種は日本産ツツハナバチ類の中で，マイマイ（カタツムリ）の空殻に営巣する唯一の種である。習性が特殊なので調査が不充分である。

- イマイツツハナバチ；姫路市※，明石市※，福崎町※，小野市※，加西市※，社町※，西脇市，吉川町，神崎町，八鹿町

本種は，1972年発見された新種で，兵庫県でしか分布が確認されておらず，年ごとに，県内での分布域の拡大と，分布域内での密度の高まりが認められる。本種は，近年兵庫県に侵入し，急速に増殖したものと思われるが，原産地について北京という説以外は，侵入経路，侵入時期等は一切不明である。虫室の壁に葉をかみつぶしたものを使うので，他種とすぐ区別がつく。